



2018年6月29日

Vol.113

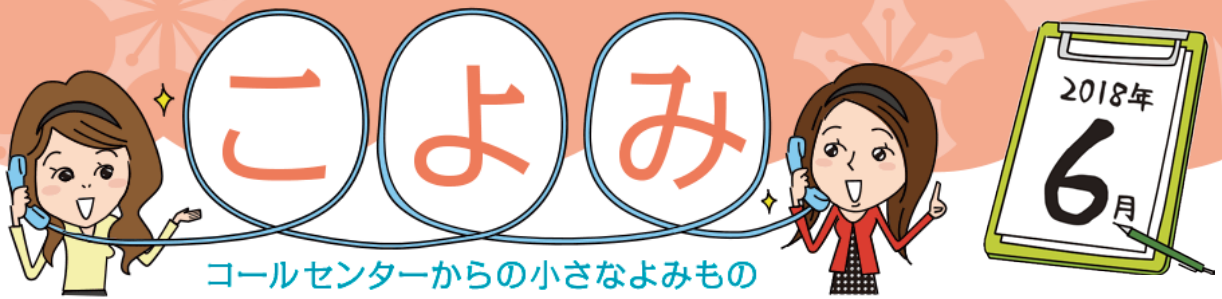
為替
ヘッジ

為替ヘッジ‘あり’と‘なし’ どちらを選ぶ？

海外の株式や債券などに投資するファンドの基準価額は、投資対象資産の価格変動に加え、為替変動の影響も受けます。例えば、米ドル建ての資産に投資しているファンドで円高・米ドル安となった場合、マイナス要因となります。この為替変動の影響を避ける方法として、「為替ヘッジ」があります。

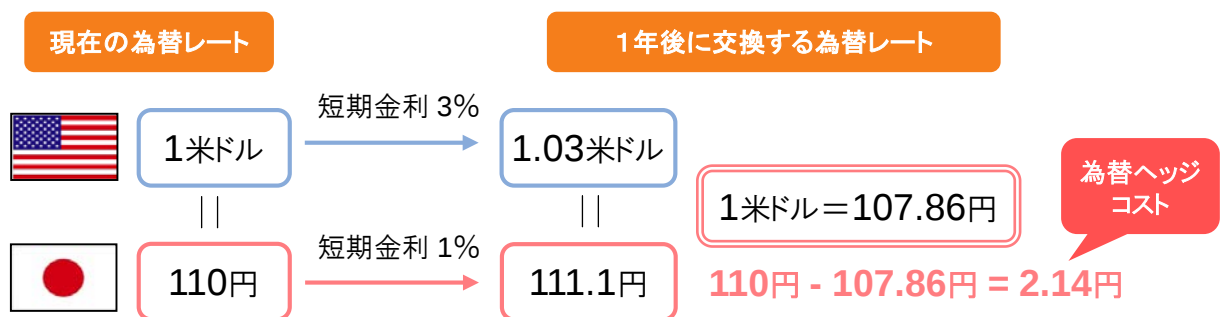
ファンドによっては、為替変動の影響を受ける‘為替ヘッジなし’コースと、影響を避ける‘為替ヘッジあり’コースから選べるものもあり、どちらを選べばよいか迷うという声も聞きます。そこで今回は、「為替ヘッジ」について押さえていただきたいと思います。





海外の株式や債券などに投資するファンドで為替変動の影響を避ける‘為替ヘッジあり’は、「為替予約取引」という手法をとります。例えば、米ドル建ての債券に投資する場合、日本円から米ドルに交換して投資するので、日本円と米ドル間の為替変動の影響を受けますが、あらかじめ一定の為替レートで米ドルから日本円に将来(例えば1年後)交換するという為替予約取引を行えば、為替変動による影響を避けることができます。これを「為替ヘッジ」といいます。

為替予約取引時点で将来の為替レートを決定しますが、その際、取引終了時まで日本円と米ドルをそれぞれ保有した場合の金利差が主な決定要因となります。例えば、金利が日本は1%、米国は3%、為替レートが1米ドル＝110円と仮定した場合、1年後1米ドルは1.03米ドル、110円は111.1円となり、1.03米ドルと111.1円の価値が等しくなります。それを1米ドルあたりに換算すると107.86円になるので、1年後に1米ドルを現時点の110円ではなく、107.86円で交換することを約束する取引を行ないます。この110円と107.86円の差額の2.14円が、為替ヘッジによるコスト(「ヘッジ・コスト」といいます。)となり、ちょうど米国と日本との金利差に相当します。金利の高い通貨に投資してヘッジする場合には「ヘッジ・コスト」として金利差分が負担となり、反対に金利の低い通貨に投資してヘッジする場合には「ヘッジ・プレミアム」として、金利差分が収益になります。現在、日本の金利は世界の中でも低い水準にあるため、為替ヘッジを行なった場合、ほとんどのケースでヘッジ・コストがかかります。



※上記はイメージであり、将来の運用成果などを約束するものではありません。

為替ヘッジにはヘッジ・コストがかかる場合があることを踏まえた上で、海外資産に投資するファンドを選ぶ際は、為替変動の影響を受ける‘為替ヘッジなし’か、影響を避ける‘為替ヘッジあり’か見極める必要があります。

※‘為替ヘッジあり’のファンドでも、為替変動の影響を完全に避けることができるものではありません。

nikko am



コールセンター

0120-25-1404

営業時間 平日 9:00～17:00

□当資料は、日興アセットマネジメントが投資信託の仕組みについてお伝えすることなどを目的として作成した資料であり、特定ファンドの勧誘資料ではありません。また、当資料に掲載する内容は、弊社ファンドの運用に何等影響を与えるものではありません。なお、掲載されている見解は当資料作成時点のものであり、将来の市場環境の変動等を保証するものではありません。□投資信託は、値動きのある資産(外貨建資産には為替変動リスクもあります。)を投資対象としているため、基準価額は変動します。したがって、元金を割り込むことがあります。投資信託の申込み・保有・換金時には、費用をご負担いただく場合があります。詳しくは、投資信託説明書(交付目論見書)をご覧ください。